

第四六回 光華講座

観仏經典としての『観無量寿経』

——シルクロードとの関わりを考える——

東京農業大学教授

山 部 能 宜

一 『観無量寿経』と観経変相

みなさん、こんにちは。改めまして山部でございます。この度は大変過分な紹介をいただきまして恐縮に存じております。

さてさっそくですが、一郷先生からご紹介いただきましたとおり、今回は『観無量寿経』というお経について考えてみたいと思っております。ご承知の方が多くかと思いますが、浄土宗・浄土真宗では、『無量寿経』（あるいは『大無量寿経』）『観無量寿経』『阿弥陀経』を浄土三部経と申します。この三つの經典が浄土の信心の根拠になっています。本日はこの中で彌良耶舎が訳したと伝えられている『観無量寿経』について考えてみたいと思

います。

五世紀初頭に、中央アジア出身の彊良耶舎という方が中国に來られて、この『觀無量寿經』を伝えられたと記録に残っております。すでにご承知の方が多いかと思いますが、内容を簡単におさらいした上で經典の背景を考えてみたいと思います。

文献的なことを申しますと、この經典には基本的に漢文のものしかありません。仏教はインドで起こったわけですから、原則としてインドの言葉（サンスクリット等）で書かれたお経が、シルクロード（南方の海上ルートを含めて）經由で中国にもたらされて漢訳され、さらに韓国や日本等に伝えられるのが普通です。ですが、この『觀無量寿經』にサンスクリットの原本はありません。中央アジアで使われていた言語であるウイグル語訳の『觀無量寿經』があるんですが、研究により漢文からウイグル語に訳されたことが分かっております。ウイグル語が元になって漢訳されたものではありません。ですから我々が使うことのできる原典は漢文しかないということになります。

お経の内容は大きく分けて三つに分かれています。導入部は中国では普通「みしょうおん未生怨」と申しますが、日本では最近ライジャクリンは「ヴァッラーヒ王舎城の悲劇」とも申します。インドの王舎城という大きな町に、ビンビサラ頻婆娑羅王という王様とお后様のアジャヤクシャトル韋提希という方がおられました。そのお二人の息子さん、アジャヤクシャトル阿闍世太子との間に深刻な親子喧嘩が起こってしまいます。そして阿闍世太子が、お父さん・お母さんをそれぞれ幽閉してしまうという大変痛ましい事態になります。『觀無量寿經』ではお母さんを主人公にして描かれるんですけども、韋提希夫人は、ご主人のみならず自分も実の息子にそういう目に遭わされることを非常に悲しまれます。そしてお釈迦様に対して、「この世界は非常に苦しいこと悲しいことばかりで、こういう世界は嫌です。どこかに悲しみのない世界はないんでしょ

か」と訴えられるわけです。それに応えてお釈迦様が「極楽という阿弥陀様の仏国土があつて、そこに行けば憂いも悲しみもない」と教えられます。お釈迦様は神通力でその極楽の姿を韋提希夫人に見せてあげるんですが、韋提希は「今、私は目の前にお釈迦様がおられるので普通は見ることのできない極楽を見ることができましたけれども、お釈迦様が亡くなってしまった後の人々はそういうことができません。お釈迦様が涅槃に入られた後でも極楽を見る方法は何かないのでしょうか」とお伺いされます。それにお釈迦様が応えて教えられたのが「十三観」という観想です。極楽という国土および、その主宰者と申しますか教主であられる阿弥陀様、無量寿仏を見るための方法です。そして最後に、往生のありさまには「九品往生」（上品上生・下品下生）といつて、生きていた時の行いに応じた九通りがあると説かれています。最後の下品のところに「南無阿弥陀仏」が出てまいりまして、真宗ではそちらを重視することが多いと思います。ですが今日は主として観想の方に注目してみます。

この経典は非常にビジュアル性の高いお経ですから、内容を絵に描くということがよく行われます。『観無量寿経』に基づいて描かれたものを中国では「観経変相」と言います。観経変相にもいろいろバリエーションがあるんですが、日本に伝えられた一番有名なものが、奈良時代から今日まで残っている名刹・当麻寺の「当麻曼陀羅」です。曼陀羅堂というお堂で本尊として祀られていました。本来の奈良時代から伝わる当麻曼陀羅はつづれ織りですが、非常に長い年月を経て傷んでおりまして、絵の内容がほとんど見えないような状況です。現在では後の一六世紀に作られたレプリカ（模作）を曼陀羅堂に掛けてお祀りしています。真ん中に阿弥陀様を中心とするお浄土の姿が描かれていまして、左側に、先ほど言いましたプロローグとなる「王舎城の悲劇」の、阿闍世王が両親に反逆する物語が下から上へと描かれています。右側に観想の方法が上から下へと描かれています。一番下に九品往生のあり様が右から左に描写されています。

今日は時間の関係上、観想の部分を中心にちよつとだけおさらいをしてみたいと思います。肉眼で見ることのできないお浄土と阿弥陀様のイメージを、私たちの心の中に作り出そうという修行法です。

まず、“日想観”です。夕陽は西に沈んでいきます。西はもちろんお浄土の方向です。夕陽をよすがとしてお浄土を思い浮かべようということかと思えます。太陽ですから実際にはあまりしげしげ見ると目によるしくないかと思いますが、夕陽を見て夕陽のイメージを心の中に刻み付けるとお経には示してあります。目を開いていても、目を閉じていても、目の前に本物の太陽がなくても、心の目で太陽が見えるようになるまでイメージを心にしつかりと刻み付けなさいということです。私どもは、お浄土とか阿弥陀様の実物を少なくともこの娑婆世界において拝むことはできませんので、なかなか想像が付きません。ですから、いきなり「お浄土の姿を思い浮かべなさい」「阿弥陀様の姿を思い浮かべなさい」と言われても、この娑婆とはあまりにかけ離れておりまして想像もできませんので、最初は身近で誰でも想像ができる、イメージが作りやすいものから入っていこうということだろうと思います。太陽のイメージができましたら、次は水です。これも、どこにでもある澄み切った水です。想像がしやすいものです。澄み切った水を想像しましたら、次はそれが凍って氷になるところを想像しなさいとあります。氷も透き通っています。実は極楽の大地は琉璃の大地と申しまして、透き通った宝石できています。氷をよすがとして極楽の透き通った大地のイメージを作るといことです。大地が透き通るといのは私どもは見たことがありませんけれども、氷が透き通っているのは見ることができます。実際に経験できるものから経験できないものを想像しようという方向でしょう。大地ができましたら、その上に立っている“宝樹”、極楽の宝石の木を思い浮かべます。それから“宝池”です。八功德水と言いまして、八つの優れた特質を持った水の池が極楽にあります。それを思い浮かべます。それから“宝楼観”です。阿弥陀様がお住まいになる楼閣を思

い浮かべます。最後は「華座観」です。ここまでで一応お浄土のイメージが出来上がります。

お浄土のイメージが出来ましたら、今度は阿弥陀様のイメージを作ろうとします。私どもは阿弥陀様にお目にかかったことがありますので、手がかりとして、まずは先ほど申し上げた華座だけを思い浮かべます。蓮の花です。蓮の花はしかるべき蓮の池に行けば誰でも見ることができますので、やはり、身近な想像しやすいものからイメージを作っていこうという方向です。その次に「像想観」となります。生身の仏様にはお目にかかれませんが、阿弥陀様のお像であればお寺に行けば見ることができますので、まずは想像しやすいお像のイメージを作る。そして脇侍である観音菩薩、勢至菩薩のイメージも作っていく。そのイメージができたなら、それをよすがとして今度は生身の阿弥陀様です。生きておられる、動かれる、そして説法される阿弥陀様を思い浮かべる。観仏は最終的には見仏、つまり仏様に会って、真理の説法を伺って、そして自分自身が真理に目覚めていく。それが最終目標ですから、仏像ではなく生身の仏様ご自身に会わなければいけないということです。それに続いて阿弥陀様の脇侍である観音様です。上は観音様の頭のまわりの円光から化仏が現れます。下は観音様のお体から五道が現れます。輪廻転生でさまよう、天・人・畜生・餓鬼・地獄です。そういう輪廻の世界を救うのが観音様です。『法華経』のなかに「観世音菩薩普門品」という章がありますが、ここでいう「門」とは顔のことで、あらゆるところにお顔を向けられるのが観音様ということです。それから、もうお一人の脇侍であります勢至菩薩を思い浮かべ、その後に「普観」となります。これは、自分自身が極楽浄土に生まれ変わる、つまり往生する。極楽の蓮の池の中に自分が坐って、蓮の花が最初は蕾ですけれども、それが開くと阿弥陀様が見えて教えがいただけるという、自分自身が往生しているところのイメージをつくります。そして最後に「雜想観」。これが仕上げです。これまで思い浮かべてきた阿弥陀様、菩薩方、全てのものをもう一度一緒に思い浮かべて仕上げを

します。まとめるとこういうことになっています。その次に九品往生のすがたを思い浮かべるのです。

これらの観想を“定善”と“散善”に分けるのが善導大師の解釈です。日想観から雑想観に至る十三観は“定善”、つまり坐禅の中で思い浮かべていきます。九品往生は“散善”、つまり普通の心の状態で思い浮かべます。

最後の方に説かれる下品上生と下品下生のところに「南無阿弥陀仏」が出てまいりまして、重要な箇所になります。

二 仏教における禅観の伝統

そういう内容のお経でありますけれども、なかなか背景が難しい。サンスクリットがないということ、それから内容上いろいろ問題がございます。「どこでできたか」という議論がいろいろあるんです。仏教学的な観点からみると、『観』というお経は『観無量寿経』だけではなく、全部で六つあります。『観仏三昧海経』はお釈迦様を見るための方法を説くお経です。『観無量寿経』は阿弥陀様を対象にします。それから、弥勒菩薩を見るための『観弥勒菩薩上生兜率天経』、普賢菩薩を観る『観普賢菩薩行法経』、虚空藏菩薩を観る『観虚空藏菩薩経』、薬王・薬上二菩薩というお二人（法華経に説かれる菩薩）を観る『観薬王薬上二菩薩経』と、全部で六つあります。これらの經典は相互に関係が深く、いろんな意味で、形式・表現が似ています。特に、『観無量寿経』と『観仏三昧海経』は非常に良く似ています。要するに阿弥陀様を見る代わりにお釈迦様のイメージを作るのが『観仏三昧海経』です。長さ的には『観仏三昧海経』は『観無量寿経』よりずっと長いです。以前、大阪大学で勉強をしていた頃に、日本仏教史で有名な黒田俊雄先生が「だいたい仏教の研究者の数は、現代の宗派の勢力と

比例している」とおっしゃっていました。黒田先生が直接おっしゃっていたのは日本仏教の研究者のことなのですが、經典の研究者についても多少似たような状況があるように思います。つまり浄土宗・浄土真宗といった。現代でも信徒・門徒の方が多い宗派が大切にする經典は多くの研究者が注目するわけです。ところがこの『觀仏三昧海經』は、昔はとても大事なお経だったんですが、現在『觀仏三昧海經』に基づいている宗派は特にないので、この『觀仏三昧海經』を勉強している先生はあまりいないんです。これを見直すことによってこれまで見えなかったことが見えてくるんじゃないかと思ってやってみたのが、私の博士論文です。

さて、この六觀經はいずれも五世紀初頭に中国にもたらされているのですが、それとだいたい同じ時期に中国にもたらされたのが「禪經」です。六觀經はすべて大乘經典としての体裁で書かれています。一方「禪經」の方は、お経と名前が付いているのもあるんですが、お経というよりは坐禪修行のための手引書とかマニュアルみたいなものです。お経ではありません。特に重要なのが鳩摩羅什の訳した『坐禪三昧經』と、仏陀跋陀羅が訳した『達摩多羅禪經』です。これらは中国における禪定の修行に非常に大きな影響を与えました。これらと比較的气氛が近いのが『禪法要解』と『思惟略要法』で、それらをまとめて「第一グループの禪經」と私は呼んでおります。一方、それらとは少し毛色の違うのが、『五門禪經要用法』『禪秘要法經』『治禪病秘要法』という三つの漢文文献で、それらを私は「第二グループの禪經」と呼んでいます。この第二グループは先ほどの『觀仏三昧海經』と似た要素が多いんです。ですから、仏教学的・文献学的に『觀仏三昧海經』を研究するにはこのあたりを見ないといけないということになってまいります。後、「梵文瑜伽書」というのがありますが、これはシルクロードで見つかった漢訳されていないサンスクリットの禪經です。瞑想の仕方を書いた手引書ですが、これも非常に重要な資料です。内容的には第二グループに近いです。第一グループと第二グループがどう違うかというと、

第一グループは割と教理的・理論的です。あまり摩訶不思議な神秘的要素はありません。一方第二グループにはちよつと密教的で、シンボリックな視覚的イメージが現れ、何を表しているのかパツと見良くわからない。例えば、白い衣を着た女の人が現れて、それが慈悲の象徴だとか、そんなイメージが出てきます。だからよく行間を読まないと言面だけを見ていてもよくわからない。そういう摩訶不思議なところがあります。それが第二グループで、これが『観仏三昧海経』と近いんです。ですから『観仏三昧海経』を研究することによって『観無量寿経』の背景も見えてくると私は思っています。

時代的に遡りますが、そもそも仏教は釈尊が菩提樹下で、坐禅をして悟りを開かれたところから始まります。仏教では三字、つまり戒・定・慧を実践の柱にします。行いを正し、心を静めて、明らかな智慧を得る。お釈迦様以来、この禅定（より耳慣れた言い方で言えば坐禅）が非常に大きな実践上の位置を占めています。この坐禅で何を観想するのかということですが、伝統的な方法としては二つあります。“不浄観”と“持息念”です。持息念は安般守意とも申しまして、安世高という仏典を最初に漢訳した方が『安般守意経』を訳していることから分かるように、中国仏教の創生期から非常に重要視された文献です。「呼吸をみつめる」。入ってくる息と出て行く息に精神を集中させる。見つめるにはいろんなやり方があるんですけど、出発点で良く使われるのが数息観と言つて、自分の呼吸を「一つ、二つ…」と数えることによって、散り乱れる心を治めていくやり方です。これは特に視覚的なイメージを伴いません。それに対して不浄観では、死体が腐っていく様を観察して、死体のイメージを頭の中に焼き付けます。目の前に死体がなくても、死体のイメージがありありと浮かぶ、心の目で見えるようになるまでしっかりと焼き付けます。それを繰り返し繰り返し観想することによって、肉体は我々の欲望の一番の対象ですから、肉体への執着から離れようとする、そういう修行方法です。

五世紀の禪経では、観想の方法が“五門禪”としてまとめられるようになります。どういう煩惱が強いかというのには人によって違います。セクシヤルな欲望が強い人は不浄観をしないといけません。それから、怒り・憎しみが強い人は“慈心法門”といって、他の人に対しての慈しみの心を養うような修行をしないといけません。愚痴というのはぶつぶつ文句を言うことではございません。愚かということでは。智慧が足りない、そういう人は因果の道理を見る。縁起ですね。これが仏教の釈尊の悟りの根幹であります。縁起の道理をよく修行することによって愚かさから離れる。それから、あっちへ思いが飛び、こっちへ思いが飛び、心がふらふらしてなかなか定まらない。いろんな思いが常に頭の中を駆け巡る。そういう人は“念息法門”、息を見つめることによって心を落ち着けます。最後に“念仏法門”が出てきます。「多等分」の人と書いてありますが、おそらくいろんな煩惱を併せ持った人だろうと思います。

では、念仏は具体的にどうするかということですが、鳩摩羅什が訳した『坐禪三昧経』を見ますと、こう書いてあります。仏像がある所に行きまして、仏様の普通の人間とは違う優れた体の特徴、例えば肉髻と申しまして頭の所が少し飛び出ている、あるいは白毫といって眉の間に巻いた白い毛がある、そのような普通の人間にはない不思議な特徴のことを三十二相八十種好（相好）と申しますが、それを心に焼きつけます。それがはつきり見えるようになったら「一心に取持して還って静処に至り、心眼に仏像を観じ、意を転ぜざらしむ」ということです。仏像をはつきり見て、その場所から静かな場所に行って、今見てきた仏像のことをいろいろ思い起こして、他に気が散らないようにして、仏像のイメージに心を集中させていく。これが観仏の修行で、念仏三昧と規定されています。だからこの『坐禪三昧経』の段階では、念仏は普通我々が想像する“お念仏を唱える”というのではなく、むしろ観仏の方を指しています。

一方『観無量寿経』の日想観ですが、正座をして西を向いて、太陽をはっきりと見なさい。心があちこち散らないようにして、鼓のようにまん丸な夕日を見なさい。見たら、「閉目・開目に、みな明了ならしめよ」とあります。つまり目が開いていても閉じていても同じように太陽のイメージがはっきりと見えるようになるまで、修習しなさいということです。これは基本的には先ほどの観仏、念仏と同じような構造です。仏像を手掛かりにするか、太陽を手掛かりにするかの違いはありますが、行法そのものとしては非常によく似ています。『観無量寿経』には像想観があると申しましたが、まず像を思い浮かべ、閉目にも開目にも、蓮華座の上に座っているのを見えるようにしなさい、と説かれます。それから相貌を見る。阿弥陀仏には八万四千の相貌があると言いますが、一つ一つ見るのは大変ですから、眉間の白毫に集中して、白毫が見えるようになったら他の相も全部見えますよというわけです。

さて、原始仏教以来の古い修行法に、さきほど申しました不浄観というものがあります。たとえば『清浄道論』というパーリ語の書物によりますと、不浄観の修行では死体を見ていきます。見たら、目を閉じて相を取ります。最初は本物の死体を見て、目が開いていても閉じていても同じように見えるようになるまで修行をしなさいということですから、これも対象が違うだけで方法としては観仏と基本的に同じです。時代的には不浄観の方が古いんですが、観仏では不浄観という伝統的な観想と類似したことを、対象を仏様の身体に替えてやっていると思います。また『声聞地』という文献がありまして、そこにはこういうことが書いてあります。実物の死体が目の前になければ、描いた、あるいは木や石や泥で作った作り物の死体を手掛かりにして観想しなさい。それから自分の部屋に戻って坐禅をして、今見てきた死体を思い浮かべなさいと、こういうことです。

死体を絵に描くこともあったということですが、アフガニスタンにタパ・エ・シヨートルというフラン

スの調査隊が発掘しました非常に大きな寺院遺跡があります。残念ながら今はアフガンの動乱で破壊されてしまったと聞いておりますが、以前は洞窟の中に骸骨の壁画がありまして、それを目連と舍利弗が見ているところが描かれていました。お寺の中に死体を描くということが実際にあったことが確認できます。当然のことながらお寺にはお参りの方が来られますから、本物の腐っている死体を持つてきて自分の部屋の横に置いておくわけにはいきません。そのようなことをしたらお参りの方に不快感を与えますので、実物の死体を修行場所の近くへ持つてくることはできません。だから死体捨て場に出かけて行ってイメージだけを持つて帰るわけです。ところが死体を見てから帰るまでにイメージがどこかに飛んでいたりしますので、手近な絵などを使っても一度リフレッシュすることであつたかと思えます。不浄観という非常に古い観法、あるいは観仏という仏像を使つてする観法、あるいは『観無量寿経』が出発点にする日想観、これらはいずれも基本的には同じ構造を共有しているということになります。

『坐禅三昧経』にはもう一つ、こういうことが言われています。まず仏像を用いて観想する（別の文献では「像観」と呼ばれています）。そして仏像が見えるようになったら今度は生きた仏様の観想に進みます。『坐禅三昧経』では観想の対象はお釈迦様です。お釈迦様のいろんなエピソードが伝えられています。そういう様々な場面を思い浮かべる。そして最終的にお釈迦様に出会つて教えを聞く（「生身観」に対応します）。さらに、如来十号という、如来・応供・等正覚・明行足、等々の仏様の異名を念じるのですが、これはつまり仏像が持つておられる様々な功德を観想することです。視覚的なものを手掛かりとして最終的には目に見えない、より抽象的な概念と申しますか、お徳に進んでいくということです（「法身観」に対応します）。これは古い仏典で言われている「法を見るものは我を見る」にも通じるでしょう。最終的に大事なものは肉体ではありません。体を見る

ことを手掛かりにして、私の本質である功德を見るように努めるということです。

三 インドの石窟寺院における修行

私たちは、かつての仏教者たちがどういう修行をしていたのかをなるべく具体的に知りたいたいと思うわけですが、今日、インドや新疆では仏教はごく一部を除いて消滅していますので、生きた伝統を見ることはできません。ですから何らかの資料から想像するしかありません。想像するための手掛かりとして文献と物的な資料がありますが、実際に修行をしていた所を想定するためには物的な資料、特に寺院遺跡が重要になってきます。寺院遺跡には、地上寺院と石窟寺院があるんですけども、私は主に石窟寺院を資料として使います。地上寺院は人々がいなくなつて廃屋になり、屋根が落ちてしまうと壁の表面が風雨に晒されて剥けてしまうので、壁画などがほとんど残らないんです。石窟の場合は放棄されても崩れない限りは天井がありますので、保存状態が地上寺院より良い場合が多いです。ですから、今日でも壁画とか昔書かれた字が残っていたりして、そういったものが大きな手掛かりになることがあります。初期の仏典には、仏弟子たちが洞窟で修行をしたことが述べられています。また「帝釈窟説法」は、私の恩師の荒牧先生が研究されているテーマですが、石窟で坐禅をされているお釈迦様に帝釈天が説法をお願いした話です。こういうことが伝えられるくらいですから、洞窟が坐禅の場所だという観念は相当古くからあったと思います。

インドにおける石窟は基本的に二つあります。塔廟窟（チャイトヤ窟）と僧坊窟（ビハラ窟）です。塔廟窟は読んで字の如く、石窟の中にストウパのあるもので、礼拝・儀式を行う空間であり、お勤めをする所です。



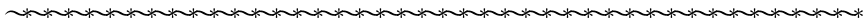
図版一：アジャンター第 10 窟



図版二：アジャンター第 19 窟

僧坊窟はお坊さんたちが住んでいた寄宿舎のような所です。おそらく坐禪の修行はこっちでやっていたのではないかと思います。インドで一番有名なアジャンター石窟は、ムンバイから内陸に入った所にあつて、川が馬蹄形に曲がった外側に貼り付くように洞窟がいくつも作られています。僧坊窟は四角い形をしていて、真ん中に広間があり周りに小さい部屋があります。部屋は二人部屋が多いです。一方塔廟窟は馬蹄形になっています。

初期の塔廟窟（第一〇窟）は図版一のような形になっていて、中に仏像はありません。最初期の仏教では仏像はございませんでした。仏塔に祀られる舍利を拜んでいたのです。その周りを右繞する。右側が浄なる手、左手が不浄なる手ですから、きれいな方の手を仏像に向けて回るといってお勤めをしていたと思われます。周囲には列柱が立てられています。後期には、基本構造は同じなんですけど塔の前に仏像が刻まれるようになってきます（第十九窟、図版二）。つまり仏像の礼拝が始まるわけです。先程来申し上げますように、観仏の修行は仏像を前提にしています。そういう意味でも、視覚的な観仏は仏像出現以降の話であろうと思います。おそらくこう



図版三：アジャンター第12窟



図版四：アジャンター第12窟 僧坊内部

いうところで仏像を見たわけです。塔廟窟には絵が描かれたり、レリーフがあったり、装飾が施されています。一方僧坊窟は生活空間ですから、少なくとも初期のもの（第二窟）には装飾がほとんどありません（図版三）。質素な造りで、広間を取り巻く小部屋の中に石造りのベッドが二つあります（図版四）。これは二人部屋の寄宿舎みたいなものです。夜はここで寝て、昼間はここで坐禅をしたんだろうと思います。今でも禅の僧堂では起きて半畳寝て一畳と言いまして、一つの畳の上で夜は寝て昼は坐禅をしますが、そんな使い方をしたんではないかと思っています。

先程申しましたとおり僧坊窟の真ん中には大きな広間がありまして、集会かなにかに使ったんだろうと思います。石窟は掘らないといけませんから大きな広間を作るのは大変なんです。実はインドの地上寺院では広場を囲むように僧坊を作るんです。塔廟窟も地上にあつた木造のお堂を石窟で再現していたようですから、僧坊窟も地上の僧坊の構造を真似しているんだと思います。地上寺院では入口の左右、広場の両側と後ろ側に寄宿舎が並びますが、実は日本の古代寺院も似た構造をしています。いわゆる三面僧坊というものです。興福寺の昔の境内の再現図を見ますと、今はありませんが、中金堂を取り巻いて、西、北、東に僧坊があつてお坊さんが住まわれる寄宿舎になっていました。法隆寺では北には講堂があるので僧坊はないんですが、西と東に寄宿舎のようなものがあつて現在でも残っています。今日ではお坊さんは住まれておらず他の用途に使われていますが、建物自体は残っています。そういう僧坊建築の流れは日本まで伝わっているということになります。

さてインドでも後期になりますと、僧坊窟自体に装飾を施すようになります。なおかつ、僧坊窟の奥に本尊が祀られるようになって、礼拝空間と生活空間が結合していくことになります。仏像を祀ると当然お参りの方が来られるでしょうから、お坊さんがおられる所で直接お参りの方を受け入れるようになるという動きがあつたのか

なと思います。

以上、駆け足でインドの石窟を見てきました。

四 シルクロードーキジル石窟

次にいわゆるシルクロード、特に現在の新彊ウイグル自治区のタクラマカン砂漠（タリム盆地）とその周辺の状態を見てみたいと想います。タリム盆地の北側のルートにそって、鳩摩羅什三尊の出身地として有名なクチャというオアシスがあります。現在クチャは近代的な都市になっていますが、ここから車で一時間くらい行った所に有名なキジル大石窟群があります。

キジルの場合は中心柱窟というのがありまして、これが礼拝の場です。華麗な壁画が描かれていて、だいたい仏伝の場面が描かれています。中心柱の前面には仏龕があり、今はなくなっていますけれども本来仏像が祀られていました。奥には涅槃像または涅槃図がありました。入口の門壁の上部にはだいたい弥勒様が描かれています。過去のお釈迦様から未来の弥勒様へ。涅槃仏は暗い所にあつて死のイメージ、弥勒菩薩は明るい未来のイメージです。このような四角い柱を中心にした中心柱窟が礼拝の場だったと考えられます。それでは、この中心柱は何なのかということですが、実はこれはインドの仏塔にあたるものだと考えられています。インドでは仏塔はだいたい丸く、ご承知の通りストウパのかたちをしているのですが、中央アジアに來ると、丸いのもあるんです。例えばクチャからさらに東に行ったところのオアシスであるトゥルファンの高昌故城南西部の大寺院にある方形仏塔では、現在では破壊され



図版五：高昌故城西南大寺の中心塔

り、ここを回って拝んでいたということが推定できます。

さてキジルに戻りますが、キジルの壁画の中に、石窟の中でお坊さんが坐禅をしているところが描かれています。お坊さんの目の前に髑髏があり、不浄観の修行をしていることが見て取れますが、これはおそらく心象風景だと思えます。髑髏が目の前に浮かぶはずはないですから、心の目に見えているところを描いているんじゃないかと思えます。これとは別の絵に、石窟の中で坐禅しているお坊さんの肩から火が出て、体から水が出ているものがあります。神通力の表現でしょう。

キジルの僧坊窟については、インドにあったような真ん中が広間で部屋が周りにあるというのとはほとんどありません。個々の僧坊が独立して作られていて、そこにはベッドがあって炉があります。このあたりでは冬はものすごく寒くなりますので、炉が必要です。こういう所でいたい一人部屋で過ごしていたようです。キジルの僧

ていますが、かつては四角柱の正面に本尊がまつられていました。今日でも仏像の膝のあたりが少し残っています（塔本体には近年の補修がみられます。図版五）。柱の側面にも仏龕があって周りを回れるようになっていました。これは何かと申しますと、アジャンタの後期の塔廟窟（図版二）で塔の前に仏像を彫りだしていましたが、その仏塔が四角くなれば高昌故城の仏塔のようになるわけです。だからこれは、明らかにインドの塔廟窟の流れを汲むものであると言えます。礼拝・儀式の場であ

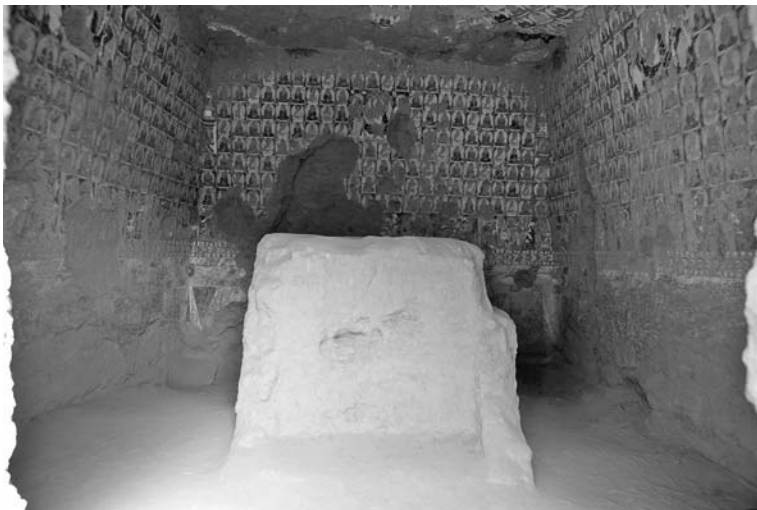
坊窟の基本パターンは、入り口にL字型に曲がった廊下があつて冷たい空気が直接入らないようにし、部屋の中にはベッドがあつて、炬があるというものです。明らかに生活空間だということが分かります。

また、それらとは別に一人の人間が中で坐れる程度の小規模な石窟があり、これが修行の場、すなわち禪定窟であつたという指摘もされています。

キジルは鳩摩羅什の出身地ですから、『坐禪三昧経』に説かれるような実践がされていた可能性はかなり高いです。『坐禪三昧経』には仏像を見たら、静かな場所に行つて修行をしなさいと書いています。また『五門禪經要用法』には、自室で観仏の修行を行うことが述べられています。恐らくは禪定窟もしくは僧坊窟で修行をしていたのだらうと想います。禪定窟や僧坊窟には仏像も装飾もないですから、中心中窟で仏像を眺めて禪定窟または僧坊窟に戻り、見てきた仏像を思い浮かべて修行していたことが推定されます。

五 シルクロードトヨク東岸の石窟

次に、トゥルファンのトヨク石窟に参ります。トゥルファンの昔の中心の一つであつたのは高昌という町で、カラホージョとも申しますが、その北にトヨクがあります。現在のトゥルファン市は西の少し離れたところにあります。高昌故城の北側には、火焰山が東西に横たわっていますが、真つ赤です。非常に暑い所で、夏は平気で四〇度を超えますから、本当に燃えるように見えます。『西遊記』では、山に燃えさかる火を孫悟空が魔物から奪つたうちわであおいで消し止めたという話になっておりまして、現在ではふもとに孫悟空の像が作られています。さて、この火焰山には天山山脈の雪解け水が流れる谷がいくつかあり、その谷の一つに沿つてトヨク石窟が



図版六：トヨク第44窟

あります。トヨクには東側と西側に石窟があります。地震で崩壊してしまったものもあり、残っているものは多くはありません。

例えば第四窟には中心柱ではないんですけれども、四角い仏壇みたいなものが真中に作り付けられています。周りには壁画がいっぱいありまして、仏壇の周りをぐるぐる回れるようになっていきます(図版六)。つまりストウパーの周りを回ると同じ行をしていたということなのです。実は京都の比叡山に常行三昧堂というお堂がございます、常行三昧の修行が今でも行われています。これは、九〇日間不眠不休で阿弥陀様の周りを右回りに周り続けて、独特の節に合わせて南無阿弥陀仏を唱える。そうすると、皆が皆とはいかないようではありますが、見える人には仏様が見えるそうです。私は経験しておりませんので体験上の事実としては語れませんが、最近亡くなられた千日回峰行の行者・酒井雄哉阿闍梨という方は、この常行三昧の行をして仏・菩薩を見るといふ体験をされているようです。こういうシルクロードで



図版七：トヨク第40窟（左）、41窟（正面）、42窟（右）

修されていた行が、一部ですけれども今日に受け継がれています。

タクラマカンの南にあるオアシス、ニヤの町には石窟ではなく木造の仏堂がありますが、常行堂のような構造をしていますので、同じような行をしていたらと思うわれます。トヨクの東岸の奥にある石窟で特に私が注目しているのは、第四〇、四一、四二窟の三つの石窟です。これらは四角いスペースを三方から取り囲むように配置されています。真ん中の四角い場所は現在天井が抜けて仮設の天井でおおっているのですが、ヴォールトというかまぼこ型の天井の痕跡が残っており、本来はここも石窟だったはずで、つまり第四〇、四一、四二の三窟は実はこのスペースを共通の前室とする複合窟だったということになります（図版七）。

さて、このうち第四〇窟は、もとももちろん石窟だったのですが、地震で入口が崩れて現在では開口部が大きく開いていて、危ないから入るなということで「立ち入り禁止」になっています。地震で天井に大きなひびが入



図版八：トヨク第40窟 頂部

ってかなり危険な状況です。ですが今日でも天井には円形のドームがありまして、壁画のごくわずかな断片が残っています(図版八)。この窟には元々は四角い仏壇が祀られていたということが記録されています。ここを回って先程申し上げた行をする、仏様を礼拝する礼拝・儀式空間であつたことが推定されます。

次に、第四一窟には、剥けている所も多いんですが、非常に華麗な仏様の壁画が描かれています(図版九)。これも明らかに礼拝・儀式空間です。これは広間です。で、集会のようなことにも使ったかもしれません。

最後に第四二窟ですが、こちらには中央の広間をかこんで両側面と奥に小部屋があり、これはインドのビハラ窟とおなじ構造になっています。ただインドではビハラ窟は居住空間だったわけですが、トヨクでは、キジルと同じような個別の僧坊窟が別に見つかっていません。そこには炉があつて窓があるんです。もちろん窓は冬には何らかの方法で塞ぐんだと思いますが。入口は鍵型の廊下を通じて入るようになっています。つまり「ビ



図版九：トヨク第41窟 正壁



図版十：トヨク第42窟 左壁（部分）



図版十一：トヨク第42窟 奥室内部

「ハーラ窟」型の石窟とは別に居住空間があるということになります。実は今トヨクでは大規模な発掘をしております、最近も炉のある僧坊が見つっています。一方、四二窟の壁画では坐禅をしているんな不思議なものを見ているお坊さんの姿がズラッと並んでいます(図版十)。一番奥の部屋の内部を見てみますと、現在では剥けていますけれども元は坐禅をしたお坊さんが描かれていたと思われる痕跡があります(図版十二)。ということはつまり、ここは仏像を祀る場所ではなかったということですね。第四二窟の構造全体が、修行の空間、禅窟であったと想定されます。

ですからトヨクでは、石窟は三本立てになっていた可能性が高いです。儀式・仏像の観察に使った「礼拝窟」、修行をする「禅定窟」、普段使っていた炉のある「僧坊窟」、この三つです。常識で考えて、壁画がある所に炉を作ったらススが出ますので、絵がススだらけになってしまうはずです。それではどうしようもありませんので、壁画を描く石窟と生活の場は分けていたと想定されます。つまり、修行専用の場として使われていた石窟がトヨクにはあったということになりそ

うです。

六 シルクロードトヨク西岸の石窟

次は反対側の西岸です。人工的に造られた道で谷から上がるようになっていますが、煉瓦で凹地を埋めて道を作るなど、非常に大がかりな工事をしています。その上に大規模な寺院遺跡があります。真ん中が第二窟で、四角い中心柱を持っています。柱の前には仏像の痕跡があり、明らかに中心柱窟です（図版十二）。手前は屋根が抜けて雨ざらしになっているので何も残っていませんが、中心柱の裏側には非常に華麗な壁画が見られます。明らかに礼拝・儀式空間であり、仏像を観察するような空間であったと思われます。それとは対照的に、第十二窟に向かって左側に並ぶ石窟の内部は単なる白壁で、飾り気何もありません。これも修行に使った禪窟であった可能性が高いです。今発掘をしているので、その成果を待つ必要がありますが。ちなみに、この石窟の一つ



図版十二：トヨク第12窟 中心柱正面

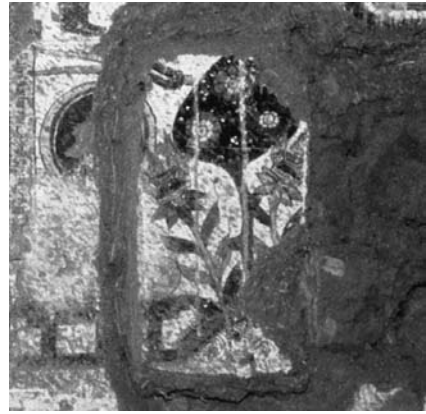
の中に「日本国大谷探検隊」っていう落書きがあるんです。昔の大谷探検隊が残っていたんですね。

真ん中の中心柱窟である第十二窟に向かつて右側に、第二〇窟があります。簡素なつくりで、手前の部屋と奥の部屋があり、ここには壁画があります。主室の奥の壁の壁画はだいたい剥げているんですけども、この壁画の断片がロシアのサンクトペテルブルグのエルミタージュ美術館に保存されていて、現地に残る壁画の残欠と合わせますと、ある程度壁画の本来の状況が分かります。今日は時間の関係でその話は省略します。石窟内部左側の壁画には坐禅をしたお坊さんがズラッと並んでいます。近年盗掘があつてちよつと残念な状態になっていますが、残っているところの一部を、以前の写真も参照しながら検討してみたいと思います。

まず坐っているお坊さんが描かれていますが、後光（円光）がありますのでかなり偉いお坊さんだと思われる。彼の前では、池の中にアヒルが浮かび、池から木が生えていて大きな花が咲き、木の上に大きな炎が上がっています（図版十三）。これは心の中で見えている光景（心象風景）だと思います。横にかつて題記があつたのですが、「行」者観+宝樹上七重網一一網間有」と読めたということです。これは明らかに『観無量寿経』の一節、「妙真珠の網樹上に弥覆せり。一一の樹上に七重の網有り。一一の網の間に五百億の妙華の宮殿有り、梵王宮の如し」と対応します。「真珠の網が木の上にかかっている」とありますが、木の上に描かれているX型のものが網を表現している可能性があります、そうしますと絵と題記が割と良く合うことになります。ただ不思議なのは、木から大きな



図版十三：トヨク第20窟 左壁（II.5）



図版十四：トヨク第20窟 左壁（III.3）

炎が上がつているのは何なのかということです。一つの可能性は、極楽の宝樹ですから光を放つわけで、光を表現した可能性はあるんです。ただ非常にメラメラと燃え上がってまして、極楽より地獄を連想してしまうんですけれども。推測ですが、実は先ほどの『観仏三昧海経』と第二グループの禅経に、「木が燃えている」という表現はいっぱい出てくるんです。また水中に木が生えるという表現もあって、絵とよく合います。英語でハイブリッドと言うんですけど、まぜこぜと言いますか、『観無量寿経』と明らかに関わりのある壁画であるにも関わらず、同時代の他の禅観経典と合うようなものが紛れ込んでいるんですね。それがちょっと不思議なんです。

同じ壁画の別のところには、坐ったお坊さんが華樹を見ているところが描かれています。現在では損なわれていますが、かつては木の両側に幡（はた）のようなものが左右になびいておりまして、やはり題記がありました（図版十四）。題記には「行者観想樹葉一一樹葉」とあったそうです。これはおそらく『観無量寿経』の（衆葉の間に於て諸の妙花を生ず。花の上に自然に七宝の果有り。一一の樹葉、縦広正等二十五由旬なり。其の葉千色にして百種の画有り」と合うだろうと言われています。「宝樹観」の中にある一節であります。ただ、この絵にも良く見ますと木の左右に花が生えていまして、「火珠」と言って、燃えている宝石が花の上に乗っているんです。宝石から明らかに炎が出ています。『観無量寿経』にはこの表現はないと思うんですが、『治禅病秘要法』という禅経には「三花の中、三の火珠有り」と言って、これと合うような要素が出てきます。基本的には『観無量



図版十五：トヨク第20窟 左壁 (III.4)



図版十六：トヨク第20窟 左壁 (II.1)

『寿経』のシーンを描いているみたいなんですけど、同時代の他の禪経と合うような要素が混ざっています。壁画のもう一つ別の部分を見ますと、「蓮華化生」を描いたと思われるところがあります。はっきりとは見えないんですけども、丸い蕾の中に赤ちゃんの頭のようなものがあり、それを行者が見ています(図版十五)。そこにはこういう題記があります。「行者当起自心生於西方極樂世界於蓮……」これは明らかに『観無量寿経』の「当に想を起し心を作して、自ら西方極樂世界に於て生じ、蓮華の中に於て結跏趺坐するを見るべし。蓮華の合する想を作し、蓮華の開く想を作せ」と合います。「普観」です。自分が往生して極樂浄土に生まれる様を思い浮かべるといふ観想です。

壁画の右の端の方を見ますと、楼閣が描かれています。汚れていて見えにくいんですけども、楼閣の横には

ハープ（箏篳）が描かれていて、弦がかすかに見えています（図版十六）。トゥルファンの古いお墓を掘ると箏篳の実物が遺物として出てきますが、それと同じようなハープがタワーの横に浮いているわけです。残念ながらここには題記はありません。ひょっとしたら本来はあったのかもしれないが、泥がかぶっていて少なくとも現状では読めません。ですが絵の内容からみて、おそらく『観経』の「水想観」にある「光明台と成る。楼閣千万にして百宝合成す。台の両辺に於いて、各百億の花幢有り。無量の樂器を以て莊嚴を為す」、あるいは「宝楼觀」の「其の楼閣中に無量の諸天有り、天の伎樂を作す。又た樂器の虚空に懸処する有り。天の宝幢の如く鼓たずして自ら鳴る」とよく合うと思われます。

先ほど申しましたように、『観無量寿経』にもとづいた絵が中国ではよく描かれまして、日本には「当麻曼陀羅」という形で伝えられています。中国ではこれを観経変相と言いまして、敦煌に今でも多く残っています。早いものは初唐くらいで、遅いものは宋代・西夏あたりまで、非常に多くの観経変相が今日でも残っています。敦煌の初期の観経変相を見ますと、最初に太陽があつて日想観に対応します。次に池があり、水が氷になって琉璃色の大地になる。次に宝樹観が描かれ、それから八功德水、続いて宝楼觀で、次に仏像を見て、さらに阿弥陀仏、観音、勢至を見て……となっていくわけです。これは『観無量寿経』とよく合います。反対側には「王舍城の悲劇」が描かれています。このように敦煌の初期の観経変相は、『観無量寿経』と内容・配置共によく合います。お経に忠実に描かれている訳です。これは日本の当麻曼陀羅も同様です。ところがこのトヨクに関しては、かなり状況が違います。表一を御覧下さい。

この表で、No.とあるのはトヨク第二〇窟左壁の壁画の中の位置を示します。その下に壁画の内容を示しています。これらの場面のうち四つのものに題記があったと記録されています（現在では失われているものもあり

表一：壁画と『観無量寿経』の対応

No.	II.5	II.4	II.3	II.2	II.1
壁画の内容	燃える木 (題記)	碁盤状の地	池中の燃える木	池中の花	楼閣、楽器
観経の対応箇所	4. 宝樹観	2. 水想観 3. 宝地観	4. 宝樹観 (?)	5. 宝池観 (?)	3. 宝地観 or 6. 宝楼観
No.	—	III.4	III.3	III.2	III.1
壁画の内容	—	蓮華中の童子 (題記)	華樹、花 (題記)	花、布 (題記)	木、水流
観経の対応箇所	—	12. 普観	4. 宝樹観	7. 華坐観	5. 宝池観

ます)。その下に、題記の内容あるいは絵の内容から判断した『観無量寿経』の対応する項目を示してあります。例えば、II.5はおそらく宝樹観に当たります。II.4は碁盤状の地面で水想観に当たりそうです。あるいは宝地観かもしれません。『観無量寿経』では水想観と宝地観は特に切れ目なしに述べられているので、どちらかと決めるのは難しいです。それから、II.3の池中の燃える木も宝樹観です。II.2の池中の花は恐らく宝池観、II.1は先程申しました通り宝地観か宝楼観です。またIII.3の華樹も恐らくは宝樹観でしょう、とこのようにだいたい経典との対応が見てとれます。ちよつと他のお経の要素が混じっている可能性もありますが、個々の内容としては概ね『観無量寿経』と対応すると言つていいようです。

最大の問題は、その配置にあります。『観無量寿経』の観法は十三観ですから、当然一から十三まであるわけです。ここで「観経の対応箇所」のそれぞれの項目につけたのが、『観無量寿経』に従つたらこういう順番になりますよ」という数字です。上の段では左から見ると、四が来て二または三が来てまた四が来て五になって三か六になって、下の段では十二が来て四になって七になって五になってという具合です。敦煌の初期の壁画では観想の項目の配置は、蛇

行はするんですけど順番は經典とよく合います。それに比べるとトヨクでは配置・順番がめちゃくちゃなんです。そこがなかなか難しいところですよ。

まとめとしてはこういうことになります。トヨクの第二〇窟の壁画は、個々の要素は『観無量寿経』と関わりが深いのは間違いない。ただし、例えば一番目を引く木の上で燃えている炎について言う『観無量寿経』では説明が難しい、むしろ他の禪觀經典を見た方が容易に説明できる、そういう要素が混ざっているということです。なおかつ、全体の配列は極めて混乱しておりまして、『観無量寿経』のシステムと全く一致しません。敦煌とトゥルフアンは比較的近い（といっても数百km離れています）けれども、全然状況が違うんですね。

七 トヨクにおける禪觀の実践と『観無量寿経』

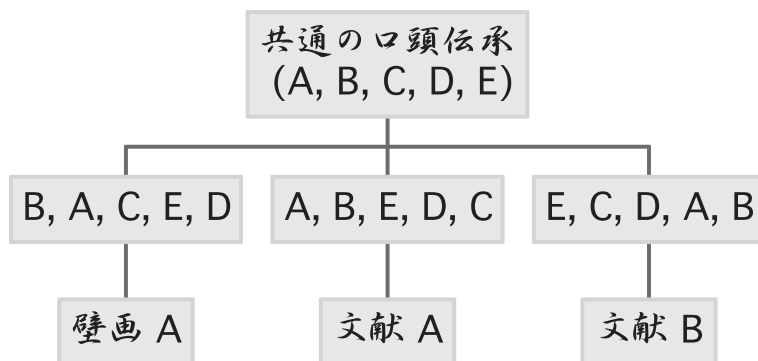
結論的に、『観無量寿経』の原形はトゥルフアン辺りでできた可能性が高いと私は思っています。仮にそうだとしますと、成立した後でそれが敦煌に持っていかれたということになります。昔はそう簡単に行ったり来たりできる距離ではありませんので、それなりに時間もかかります。そうすると、敦煌ではおそらく仏説として權威が確立した『観無量寿経』として迎えられ、仏説ですからその通りに描かないといけないということで、画師たちがお経に忠実に描いたのが敦煌の觀經變相ではなかったかと思っています。

逆にトゥルフアン、トヨクにおいては、禪觀經典の伝承に、仏説としての權威がまだ確立していなかったのではないかと思います。壁画の雰囲気から見ても、トヨクのあたりでこのような觀法を実際にやっていた可能性が高いと思うんですね。よく整った敦煌の觀經變相をモデルにしてトヨクの混乱した壁画が描かれたというのもあ

まりありそうにない想定です。トヨクの壁画は、現地における禪觀實踐の内容を忠実に描いた可能性が高いと思います。もう一つ、『觀經』とその他の禪觀經典は混然一体のものとして、現地の人々の意識の中で区別されていなかったように思います。我々の中には『觀無量壽經』を読もうと思つて間違えて『觀仏三昧海經』を読むはいないでしょうが、極端に言うとう当時はそういうことも可能な、ごつた煮的な感覚だったんじゃないかと思っています。禪觀經典と壁画は個々の要素は対応します。第四二窟も同じです。『觀無量壽經』よりは『觀仏三昧海經』とか他の禪經と合うんですが、それにしても合うのは個々の要素であつて配列は全然合いません。さらに禪觀經典相互の關係をみますと、『觀仏三昧海經』と『禪秘要法經』は非常に内容が近いです。相当、パラレルというか並行する内容が出て来るんですね。明らかに關係しているんですけども、ただ、似たようなものが同じ文脈で同じ順番で出て来るかというところではありません。似たような要素が異なった配列で現れるのです。

通常、美術史の先生方が仏教美術を研究する時には、典拠になつていたと思われるお經を探すんです。觀經變相なら『觀無量壽經』で、藥師變相なら『藥師經』ですね。そういうのを見て、お經には異訳のある場合がありますから、どのバージョンのお經が一番近いとか、そういうことを議論していくので、お經に基づいて絵が描かれたということがいわば暗黙の了解として語られることが多いですが、トヨクの場合はどうもそうじゃなさそうです。そう見ると説明が難しい、というのもあまりにもぐちゃぐちゃなんです。結局、壁画と文献が共通の口頭伝承の別の側面を伝えていたと考えた方がいいのではないかと思います。それを模式図的に表したのが図一です。

途中の議論をだいぶ端折っていますので、これだけを言つたつて納得していただけないかと思うんですが、他にもいろいろ理由があつて、私は博士論文で最終的にこういう結論に達しました。



図一：口頭伝承の模式図

坐禅をしようとする人は、今も昔もお師匠さんの所に弟子入りをし
て、マンツーマンに近い関係で教えていただく。それは基本的に口頭
伝承の世界なんですね。仮に現在の禅の道場に行ったとしまして、お
師匠さんが「ここに教科書があるからこれを読んで、この通りに坐禅
しなさい」と、そんな指導はまずしません。かならず口頭で「こうせ
い」「ああせい」と指導があります。師匠にも若い頃に師匠がいたわ
けですから、師匠の指導内容は基本的にはその師匠から受け継いだ教
えですよ。師匠から弟子、さらに孫弟子に至る伝言ゲームになって
くるわけです。昔「伝言ゲーム」というのをテレビ番組でやってまし
たが、最初の人の言っていることと最後の人が言っていることはかな
り変わっていました。例えば、私は禅宗とご縁があるので禅宗の話を
しますが、基本的に臨済宗と曹洞宗があるんですけど、同じ曹洞宗で
も道場が違えば作法が少し違ったりするんです。臨済宗も同様です。
結局、伝言ゲームは何世代か経つとどうしてもずれるものなんです
ね。

シルクロードにおいてどういう状況があったかという、先ほどの
“燃える木”が観想のレパトリーなんです。あるいは“骸骨”がレ
パトリーです。“花の中の燃える宝石”もレパトリーです。似た

ようなイメージがあちこちの文献に出て来ます。“花の中から少年が出て来る”ということもあります。似たようなレパートリーがいれば共有財産として行者の間に共有されていた。ところが、それを具体的にどう並べて瞑想していくかというアレンジの仕方は、それぞれの流派によってかなり自由だったのではないかと思います。口頭伝承ですからいろいろバリエーションがありうるわけです。例えば「BACED」と並べる人もいるでしょうし、「ABEDC」と並べる人もいるでしょうし、「ECDAB」と並べる人もいるわけです。他にももっといろんなバリエーションがあったはずなのですが、さっき申しましたように今日シルクロードに生きた仏教の伝承はありません。たまたま昔あった伝承が文献とか壁画として記録されたものだけを我々は見ることができません、それ以外の記録されなかったものは消えてしまっただけです。文献と壁画は個々の要素は合うけど順番が全然合わない。直接何らかの文献を見て描いたんじゃないくて、共通の伝承のプールから取ってきて、壁画はあるバージョンを伝え、文献はまた違ったバージョンを伝えたということでしょう。つまり口頭伝承のちよつとずつ違ったバージョンが伝えられた結果だと思っています。そういう生きた伝承がトウルファンにあったと考えるとこの説は成り立ちませんから、もしこの想定があまり的外れでないならば、『観無量寿経』や『観仏三昧海経』は、トウルファンあたりで行われていた実践を伝えていた可能性が強いということになると思います。

最終結論です。『観無量寿経』『観仏三昧海経』その他多くのものは、表現・内容から見てインド原典を翻訳した経典ではない可能性が高いと思います。これは大分以前に龍谷大学の月輪賢隆先生が指摘されまして、おそらくその通りだと思っています。今回はほとんど触れられなかったんですけど、禪経の第二グループとしたものは、中央アジアから見つかった「梵文瑜伽書」というサンスクリットの漢訳されていない禪観経典と近い関係にあるんですね。全体的な構成は別なんですけど個々の要素は似たようなものがいっぱい出てきます。おそらく同

じバックグラウンドから来ていると思われます。これも重要な資料です。『観無量寿経』の成立をめぐる議論が難しい一つの大きな理由に、『観無量寿経』のサンスクリットがないということがあります、それが大きな足枷だったんですけれど、『観無量寿経』自体は「梵文瑜伽書」とはあまり合わないにしても、『観仏三昧海経』やその他の第二グループの禅経にはこれと似たようなイメージがよく出てきます。「梵文瑜伽書」が物理的に中央アジアにあったことは間違いないので、中央アジアでこういうような瞑想がされていたという可能性はかなり高いです。トヨク石窟の壁画には、実際にそういう行法がトゥルファンで行われていたことを強く示唆する実践的な雰囲気があると思うんです。石窟の構造もそうなんです。極めて実用的な造りになっていまして、例えば第四二窟ですと、広間の周りの脇部屋に入ると、入口の上に小さな物置の棚みたいなものがあるんです。明らかに行者が長い間そこに留まっていた、非常に実用的な用途に使ったということが窺えるんですね。このような理由によって、『海経』を中心とする漢文禅観経典（『観無量寿経』を含む）は中央アジア、特にトゥルファンを含む地域で形成された可能性が高いのではないかと私は思っております。

ちょうど三時であります。どうもありがとうございました。

●フロアー1

『観無量寿経』がシルクロードで作られたということ、サンスクリットが見つからないということ、インドに原本がないということは、何か問題があるんですか。

● 山部

これは学問的な議論であって、信心の上での拠り所としての価値判断ではないんですね。例えば親鸞聖人がお書きになった『教行信証』や『歎異抄』は、信心の重要な拠り所になっているわけですが、明らかにインドの成立ではないですね。日本で書かれたものです。しかし、だから価値がないというようなことは全く言えない訳です。どこで書かれたものであっても真理に適うものであれば、それはお経であると言えるわけで、「法性（真理）に違わないものが仏説である」という伝承もあります。ですからこれは決して価値判断の問題ではありません。我々学問的に仏教を勉強している人間には、どうしても歴史的な背景、発展のプロセスをはっきりさせたいという本能的な欲求があるんです。そういう学者がやっている議論だとお考えいただければと思います。

● フロアー2

今日は、壁画と経典の文献の関係をお話いただきましてありがとうございます。先ほど木に炎があつた絵がありましたね。その根拠は何だろうと私も興味があつたんです。私もキジルの石窟に行つたんですが、あの辺りは中央アジアなのでゾロアスター教などの影響は出て来るんでしょうか。ただ私はお経との関わりを全然知らないの、中央アジア全般で見てお互いの影響が出てきているのかなと、そのあたりの見解はどうでしょうか。

● 山部

確かにその辺りの影響は考えないといけないと思うんですが、今回お話したのは主にトゥルファンで、シルクロードの中では比較的東の方に位置しているんですね。ゾロアスター教がないわけではないんですが、そこま

で影響を強く認めることが、あのあたりでできるかどうか私にはよく分かりません。もう少し西の方であれば話は違ってくるかも知れませんが、そういう地理的な条件も考える必要があると思います。後は、私がそちらの方面に詳しくないのですが、影響を指摘するためにはきちんと文献的な根拠を示す必要があると思うんです。ゾロアスター教の文献に基づいてそういうことが言えるかどうか。なおかつその文献がそのあたりで読まれていたとか、知られていたとか、そういったことが証明されないといけない。そういう二つの条件が必要になってくるかと思います。私が今日指摘した禪観經典に関しては、明らかに壁画とよく合うような記述が実際にいくつも出て来ます。ですから無関係ではないだろうと思います。

こういうことを議論する時に、ありふれたイメージですと当然あちこちに出てきますから、あまり参考にならないですね。例えばお釈迦様が坐禅しているイメージとかであれば、仏教圏ならどこにでも出てきますから、それはあまり参考にならないんです。それとは違って“燃えている木”というのは不思議なイメージ、あまりないイメージですよ。そういう不思議なイメージが壁画と文献に共通して出て来るのは偶然の一致ではなからうと私は思っております。

口頭伝承は頭の中にあるイメージを表現したものでしょうから、イメージの中に仏教以外の影響があったことは可能性としては当然考えられると思います。具体的に立証できるかどうかですね。また私も考えてみたいと思います。

(初校時付記) 本稿は平成二六年一月二日に光華講座で行った講演の内容に加筆訂正を加えたものである。貴重な機会を与えて頂いた京都光華女子大学の方々に深謝申し上げます。なお、本稿中に述べた通り、トヨクで

は現在発掘調査が進行中であり、その成果をふまえて新しい窟番号が振られている。ただ、発掘はまだ完了しておらず、現段階で全ての石窟に新しい編号が与えられている訳ではないようである。従って、本稿では従前の編号（吐魯番文物局編号）を用いた。本稿で用いた写真は全て筆者が撮影したものである。